

山と博物館

第45巻 第1号 2000年1月25日

市立大町山岳博物館



「初冬の立山」北アルプス別山より

撮影 大石高志

新しい年

有川美保子

コンピューターの誤作動が心配され、石油ストーブに火鉢、飲料水まで用意しなければ、と騒がれた二〇〇〇年問題。私たちの生活に大きな影響もなくいつもと変わらぬ穏やかな年明けになりました。

私は、元旦から勤務のため安曇野を一路南に車を走らせていました。カーラジオからはじめに耳に入ってきたのは、"水をテーマにした全国生中継番組でした。九州からは、"神社の湧水を飲む会"の元気なおじいさん?おじさんの声でした。会員の方々の多くは毎日一升の湧水を飲み体内の解毒作用をはかり、腹の底から大きな声で笑い健康な毎日を過しているという。埼玉県からは、新興住宅地の一画に水田があり脇の小川にメダカが棲息していることを発見した新興住宅地に移り住む主婦が集まり、メダカを守る活動をされている方の声でした。地元の方と懇談を重ねる中でメダカの住める環境の大切さを初めて理解されたときのことを声を弾ませて語っていました。

折しも車は、穂高町の水郷、等々力大橋の上を走っていました。十数年前初めて穂高川の堤防を散策し早春賦の歌碑の前に佇み、山脈が夕日で茜色に染まり川面に映つた情景に感激し以来、わさび田を作る透明な水が川底いっぱいに繁った水草と共にゆったりと流れる様に触れることを楽しみに豊科、松本方面に出掛けるときは、回り道をして澄んだ川の流れを楽しみに、いやしの時にしていました。

昨年十二月松本市でビオトープフォーラムが開催されました。"身近な自然をもっと増やそう"というテーマで講演やビオトープ展が催され新鮮な気持ちにさせられました。

二〇〇〇年代、私たち人間が自然の一員として共に生きる時代にと思いを新たにした元旦でした。澄んだ空気・澄んだ水を求めて…。

山仕事の古今（前編）

狩野清高

する地籍）よりかえつてうちの部落の方が古いんじゃないですかね。

平成一年八月二七日から二九日かけて、大町市教育委員会生涯学習課文化財係によつて同市鹿島部落の民俗調査が行われた。調査は国学院大学・倉石忠彦教授（同市文化財審議委員）と跡見学園女子大学・倉石あつ子助教授と学生らによる聞き取りを中心と進められた。

その調査に一日参加し、実際に鹿島部落の方からお話を聞く機会を得た。その中でも山仕事のお話は大変興味深いものであった。

そこで同年一月三〇日、山との関わりについてあらためてお話をうかがうために鹿島部落へ足を運び、昔をよく知る狩野清高さん（大正一二年三月一日生）を訪ねた。鹿島槍ヶ岳の麓に拓ける鹿島部落では、里山も含めた周囲の山々とのように付き合ってきたのか。これはそこでお話をいただいた内容を編集したものである。

（編集部）

2. 「川流」から「炭焼き」へ

この部落は昔、薪にする木を切つて鹿島川へ流して大町へ持つて行つて売りさばくという仕事をだいたい昭和七、八年頃までやつていました。

だけども、爺ヶ岳スキー場近くの矢沢っていう沢に大きな堰堤ができるからにはもう川流しということは許可にならなくて、それで炭焼きに切り替えたわけですね。まあ私の覚えでは昭和八年か九年頃ですか。それまでは薪を切つてたけども、それからはもう炭に切り替えたね。昭和一二年に支那事変（日中戦争）が始まつたでしよう。そのころにはもう炭を焼いていましたからね。それまでも国有林から薪にする木を払い下げてもらつては生計を立てていたんだけれども、今度もまた同じく国有林から木を払い下げてもらつて炭を焼いていたわけです。

3. 戦後の燃料不足、そして炭焼き最盛期

た。



写真1. 話者・狩野清高さん

鹿島部落で生まれ育った狩野清高さん（大正12年3月1日生）はかつて炭焼にたずさわり、この辺りの山仕事を詳しく知るおひとりである。当時、山仕事に使用した道具を身につけ撮影に応じてくださいました。

1. 落人伝説の真実

ここ鹿島部落は、その昔鹿島槍ヶ岳のカクネ里に平家落人の住み着いたのがはじまりだといわれていますよね。本当の昔つてのは、部落の戸数は四戸で、それがだんだんと里へ下つてきて今ある一戸になつたといわれているが、まあ確かなことは分からぬね。

この部落は大きな火事に二回遭つてましてね、大正七年と二年。この部落で二回とも全く火事に遭つていいのは二軒だけ、この家々は昔つから火事に遭つてない。火事に遭う前の家々には家系図のようなものもあつたらいいんですがね。なんしろ昔つからこの部落だつてことだね。源及（鹿島部落に隣接）で売りさばいたんです。

部落の人たちが薪を切つていたころは、私はまだ子どもでいたからね。小学二年生か何かだったでしょう。親父や兄貴がその方の仕事にたずさわっていたから、川へ木を流していくときにそれを見に行つたりしてたわけですね。それで戦争から帰つてきたら食糧不足で食べる米がない、つてなわけですね。まあひどい目に遭つたですよ。

それで戦争から帰つてきたら食糧不足で食べる米がない、つてなわけですね。まあひどい目に遭つたですよ。

それだけども、部落の人は共有の山では全然炭焼きをしないんです。それつてのは国有林をある程度自由に安く払い下げてもらつていたからね。この地元の人は毎年毎年時期が来れば炭焼用の木材を払い下げてもらえたから、一軒で炭焼きの仕事に携われる人は何人でもそこに携わつてやつたつてわけ。だから自分たちの山はそのままにしておいた



写真2. 鹿島集落

鹿島集落は鹿島槍ヶ岳の麓に位置し、周囲をいわゆる里山などの山々に囲まれている。

5. 「炭焼き」という仕事

私が炭焼きを覚えてつからは、この部落の東山での仕事が主だったです。炭に焼いたのは白炭でね。昔は一回に三〇kgの俵入れをだいたい大きな釜の人は一〇俵。それくらいの炭は、三日か四日つていうとできる。それを四日おきに休まず焼く。うちの部落で焼いたのはほとんど「シロ」つていてね、白炭だけですね。

炭にした木つていうのはナラとかクリとか、それからカエデ、シラカバとかあらゆる雜木を全部使いました。ただ、なかにはマツとかヒノキとか針葉樹が天然木であつたけども、それはやらない。針葉樹は全然炭に焼かなくて広葉樹だけね。

4. 山をくじ引きで決める

仕事をする山の決め方つていうのはね、昔つからこれは村内で毎年くじを引きました。そうでないと山の奥とそれからまえどあるでしょ。行って帰ってくるのとで、同じ山でもいいぶ仕事にかかる時間と労力に差が出てしまうから、くじを引いたこともあるといふことです。山のまえどを取つた人が奥の人に多少なりとも金を出すとか、今年麓にいた人はその次の年んときは奥に行くとかね。まあ、あんまり金つてことは聞かなかつたがね。く

じつ引きでもつて、部落でいざこざが起きないよう話をしてやつていたというわけです。

て立て掛けた。そうするうんと時間が早いからね。それで立ててしまつたら、釜の口をだいたい三分の一あけて、あとは塗りふさげてね。そして空いた口のところから下へ火をつけるわけ。これがついちまうとちょっと風を入れるだけにして、ビシャツと口をふさげてから下へ燃え下がつて焼けていく。

それで一晩中かけて焼く。その間「セイレン」をくれるつていて、何ていうか炭に風を入れて炭を硬くする作業を時間をおいてしまくちやいけないから、家に帰つてきました。それができないから泊まつてね。夜二回も三回も起きて、そして風を時間になつたらくれてね。そして早く真っ赤にして出すつていう作業をやつたです。

夜見ていると下がまだ黒くてモンモンと燃えているわけですよ。それを早く燃やしちまうために口の少しあいたところから自然と風を入れて、そして釜の後ろのところに「煙出(けむだし)」があるでしょ、それを順に開けていく。火が上へ回つて完全についたら、煙出も閉める。一度に閉めたら消えちやうから順に三回くらいで閉めて、それで三日なら三日間のうちに燃えるように調整するわけ。

そうすると次の日の朝四時ころには焼きあがつてしまふです。それから二時間ほど冷だけの大きさで、上はだいたい四尺くらいの高さに切つてあつてね。はじめは先が二股に分かれた「タテマタ」(先端が金属で、柄が木製の一・五m位の棒)で奥の方から木を立て掛ける。そして半分からまえどの口元へ来るとなかなか時間がかかるから、若い人なんざ(間)へみんな入るから、絶対燃え上がらないね。それが水だつたら炭を傷めちやうか水は絶対に使わない。

さつきつけた火が焚けるまでの間に、ゴベをかけた炭を俵に詰めるわけ。だから次から次へと忙しいですよ。それでそうですねえ、一〇俵くらいの炭を全部始末してしまつのが夕方の四時ころでしたね。

その炭をすぐ持つて来るつてわけにはいかないから、釜のじき(すぐ)そばへ小屋をかけます。そうですねえ、五〇kgくらいは積め込めましたか。ちよつとした山の木やトタンを利用したりして、雨のあたらないようにそこへ積み込んでいく。それで小屋が一杯になると山から運び出す。そして鹿島川を架線を使つて横断して持つてきました。今では索道つていうけども、昔は架線つていつた。八番線くらいな太さの鉄製の針金をこの川幅三〇〇mくらいまでずつと張つて、木でこした(作った)車をそれへぶる下げる一俵ずつ運び出しましたよ。それで架線に近い人はそこまですぐに運べたけども、沢の奥へ入つた人は土橋(ドソリ、ドソーリ)つてものを使わなきや持つてこれない。土橋は木でできたソリで土の上じやあ重たくて曳いて来られないから、沢にずうつと間隔をおいて丸太を敷いて、その上を曳いてきたです。そういう仕事をやつたわけですよ。

それからだいたい二時間くらいで次の丸太を立て込んでしまつたらまたすぐ火をつけた。そしたらようやく小屋へ入つて朝飯を食

(次号へ続く)

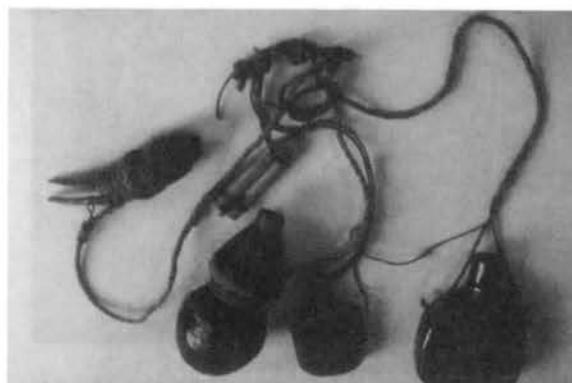


写真1 弾丸入れ 左端「カラス口」(山岳博物館 所蔵)

鎌木外雄博士は「カモシカの保護に関する見聞」の中で、「カモシカはその肉美味にして珍重せられ、毛皮は敷物に、皮は古来靴の輪に、又革として靴の材料に供せられ、角はカツオ鉤に、又犀角の如く漢方薬に利用せられ」と述べている。(1)

カモシカは古い時代から狩猟の対象となつており、肉や毛皮などはさまざまな形で利用されてきた。ここでは角がどのようなことを語つて、どのように利用されてきたかを見つめたい。

カモシカの角には、角の基部から先にかけ

てリング状に凹凸がある。これを「角輪」と

この角輪はオス、メス共にあり、角輪につ

いては角輪に先にかけられており、肉や毛皮などはさまざまな形で利用

されてきた。ここでは角がどのようなことを語つて、どのように利用されてきたかを見つめたい。

カモシカの角には、角の基部から先にかけ

てリング状に凹凸がある。これを「角輪」と

この角輪はオス、メス共にあり、角輪につ

いては角輪に先にかけられており、肉や毛皮などはさまざまな形で利用

されてきた。ここでは角がどのようなことを語つて、どのように利用されてきたかを見つめたい。

カモシカの角には、角の基部から先にかけ

てリング状に凹凸がある。これを「角輪」と

この角輪はオス、メス共にあり、角輪につ

いては角輪に先にかけられており、肉や毛皮などはさまざまな形で利用

されてきた。ここでは角がどのようなことを語つて、どのように利用されてきたかを見つめたい。

カモシカの角には、角の基部から先にかけ

てリング状に凹凸がある。これを「角輪」と

いての研究が進み年齢査定が可能となつた。角輪と角輪にはさまれた凹部は、主に春から夏にかけて蓄積される毎年の成長量である。三歳までの若い時期には、初期成長のため大きいが年齢と共に少くなり、次第に一定の量に安定する。オスの角は全てこのバターンを示している。

しかし、メスの方は三歳以上でも目立つて少ない成長量を示すものもあつた。この原因については北海道大学の杉村誠・喜多功両先生と、農林水産省森林総合研究所の三浦慎悟先生の共同研究により解明された。

メスの角の成長量の増減は繁殖状況によつて左右され、また、餌条件の良し悪し、病気など繁殖以外の要因も関係していることがわかつた。(2)

カモシカの角は単なる防衛の武器としての他に、そのカモシカの生きてきた過去を示す履歴書でもあつたのである。

このカモシカの角を人々はどういう形で活用してきたのであらうか。

平安朝の昔、カモシカの角が税金代わりに納められ記録がある。記録には土佐、安芸、伊豆、美濃、出羽など十五カ国から角七十二頭分が貢進したとある。(3)

醍醐天皇の命により編纂をした「延喜式」(九二七)には薬物として「羚羊角」があげられている。(4)

この角は削つて煎じ、脚気や解熱、腹痛、はしかなどの病気に用いられていたようである。(1)

また、薬用以外ではカツオ釣りやイワシ釣りに擬似餌として利用され、需要が供給に追いつかなかつたといわれ高値で取り引きされたという。(1)

田県松木内村。(5)

平成十年十一月、金沢市のひがしの廓の当時のお茶屋造りをそのまま保存している「志摩」(金沢市指定文化財)を見学する機会があつた。

そこで思いもかけぬものを見つけていたのである。それは当時の上流町人や芸妓が用いた銀煙管や煙草入れ、鮮やかに彩色された櫛、鼈甲の笄などの粋な細工が施された展示物に

「カモシカの角」あれこれ

千葉彬司

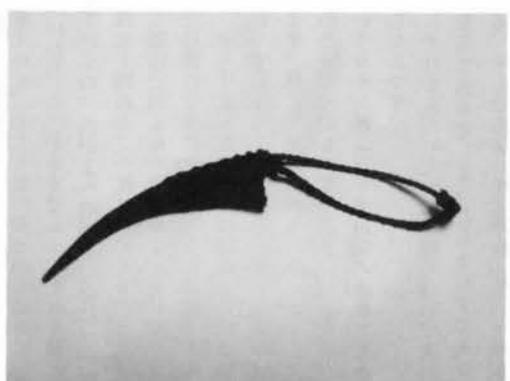


写真2 カモシカ角の根付 (「志摩」島謙司氏 提供)

(注) 笠 女性の髪飾りのひとつで、髪などに差す物
(注) 根付 煙草入れ、印籠、巾着などを帯にはさんで腰に下げる時、落ちないようにそれらの紐の端につける細物
(注) 珍羊角 カモシカの角

(大町山岳博物館 顧問)

参考文献

(1) 千葉彬司 (1982) 「カモシカ物語」 (6・179・180) 中央公論社

(2) 大町山岳博物館編 (1981) 「カモシカ」 (78・79) 信濃毎日新聞社

(3) 毎日新聞 (1992) 特集「知られざるカモシカ」 (1・2)

(3) 宮尾徹雄 (1985) 「ニホンカモシカの分布と生活史」 (2)

(4) 動物と自然 (15-11) (15-11)

(5) 司東真雄編 (1992) 「マタギ狩猟」 (11・12) 岩手県北上市北上上諏訪会

混じつて、ほとんど加工らしいものが施されていない一本のカモシカの角が展示されているのである(写真2)。

いつたこのカモシカの角は何の目的で使われていたのであらうか。「志摩」の島謙司氏によると、煙草入れの「根付」として使用されていたものだそうで、多分「氣の張らぬい時」に使用されていたものであろうとのことであった。カモシカは白山山麓に多く生息しているところから、そこのものが捕獲され利用されたものであろう。

ささらに、角を加工して弾丸の差し入れ口として活用した。角の中をくりぬき先を削り、基部に弾丸入れの小袋を取り付けたもので、地方によつてはこれを「カラス口」と呼んでいた。差し入れ口の加工した形が、黒くカラスが嘴を半開きにした形に似ているところからそのような呼び名になつたようである。

(1) (写真1)

角の中をくりぬいてパイプにも加工されたいたよう、年寄りのカモシカの角はもろいので、若いカモシカの角で作るのが良いとも言われていた。(1)

また、幼獣の角は「根付」にされ、「緒じめ」や飾り物などの細工ものに利用した(秋田県桧木内村)。(5)

そこで思いもかけぬものを見つけていたのである。それは当時の上流町人や芸妓が用いた銀煙管や煙草入れ、鮮やかに彩色された櫛、鼈甲の笄などの粋な細工が施された展示物に

山と博物館 第45巻第1号

(2000年1月25日発行)

発行 〒399-0002 長野県大町市大字大町八〇五六一
市立 大町山岳博物館

TEL 〇26-4133-1021
FAX 〇26-4122-1233

印刷 奥村印刷
年額 一、五〇〇円 (送料共)
郵便振替口座番号〇〇五四〇一七一三九三